

## 19世紀前半のフランスにおける 女子教育論に見る知育擁護の言説 (3)

小 山 美沙子

### はじめに

世紀初頭的女子教育論を扱った拙論「19世紀前半のフランスにおける女子教育論に見る知育擁護 (2)」(本学『紀要』第46号、2014年)に続き、最後に本稿では、七月王政時代に発表され、19世紀末まで版を重ね続けたL.-A. MartinとMadame Necker de Saussureの女子教育論(後者についてはその教育論の書の第3巻)を取り上げる。

産業、経済とブルジョワ文化の進展に伴う社会の複雑化の中で、国の基礎である家庭の中における妻、母、主婦としての女性の役割は益々重要になる一方、大革命以来続いた社会の有為転変の経験や、公教育制度(特に初等教育)の整備、女子労働者の増加などに見られる新しい社会現象も、女子教育論に反映することになる。

事実、MartinとMadame Necker de Saussureは、時代の状況を理解し、女子教育の重要性を訴えたのであった。とりわけ後者は、良妻賢母主義の枠を超え、女性達の多様な生き方の可能性まで考慮した教育論を、より具体的な教育内容にまで言及しながら展開しており特筆に値する。男子に比べて女子の公教育の整備の遅れが目立つ状況を思えば、彼らの主張は時代をリードするものであった。

### I. Martin

世紀初頭、*De la nécessité de l'instruction pour les femmes* (1805) を発表し

たMadame Gacon-Dufourは、女性の男性への影響力の重要性を強く認識していた。又、彼女を含め、これまで言及してきた教育論のほとんどが、子供の教育者としての女性の役割の重要性に注目していた。男子の初等教育の整備を進展させるLoi Guizot(1833年)が出た後、こうした点に最も着目して、女性による教育の影響力に期待し、その教育の重要性を訴える書が現れる。それは、Louis-Aimé MARTIN<sup>(1)</sup>(1782-1847)の、*De l'éducation des mères de famille, ou De la civilisation du genre humain par les femmes*<sup>(2)</sup>(2 vol., 1834)であった。

大革命以来の社会の有為転変、混乱の時代を生きてきた彼は、「国民の幸福を作りうるのは、産業でも、学問でも、機械でも、書物でもない […]立法者は、魂という人間の神聖なる精髓を育むことを怠っている<sup>(3)</sup>」とし、とりわけ、この魂の教育者としての家庭の母親の役割に注目したのであった。彼が、本書で、「remplir leur destination [des femmes] en se chargeant de cette éducation supérieure qui imprime le mouvement à l'âme<sup>(4)</sup>」するよう女性達に訴えかけることを意図したのはそのためであった。こうした意味において、子供を育てる有能な母親の養成を訴えたのである<sup>(5)</sup>。尤も、一家の母親は同時に妻でもある。「妻によって再生すべきなのは夫である<sup>(6)</sup>」と、夫に対する妻の精神的影響力にも注目していた。男性の全生涯は、女性の影響下にあると考えるとするMartinは<sup>(7)</sup>、女性の影響力の大きさを強く認識していたのである。したがって、女性自身の教育がそれだけ重要性を増すと考えていた<sup>(8)</sup>。

Martinが女性に期待する魂の教育とは、徳育であるが、まず、その担い手である女性の魂を育まねばならない<sup>(9)</sup>。とはいえ、Martinは、勿論«femmes savantes»を復活させる意図のないことを明言している<sup>(10)</sup>。しかし、人の「知的能力と魂の能力は、同時に伸ばされるべきだ」と考えると共に<sup>(11)</sup>、«L'ignorance croit tout, la superstition ne raisonne pas<sup>(12)</sup>»と、無知と迷信を悪と見なす彼は、女性の知育を軽視したわけでは決してなかったのである。彼は、歴史を遡り、全ての悪が教父達による«ignorance」と«innocence»

の混同から生じ、「on voulait les femmes niaisées dans l'intérêt des maris, et les peuples ignorans dans l'intérêt du pouvoir. Les femmes, ainsi assimilées au peuple, ne reçurent, comme le peuple, aucune espèce d'instruction<sup>(13)</sup>」と、女性が無知蒙昧の状態を強いられていた過去の時代を批判している。更に、Rousseau に対しても、女性を母親と妻の役目に回帰させた功績を讃えながら、他方で、Sophie を「あの俗悪な無知」の中で育てることで、「時代遅れの偏見<sup>(14)</sup>」に譲歩する結果になったことには批判的であった。

現代においては、さすがに、女性達の知性を育むことについては同意がなされており、多様な知識に女性達が接近できるものの、思考力が育まれていないという欠点を指摘している<sup>(15)</sup>。又、例えば、「Racine, La Fontaine, Fénelon, Bossuet, Pascal, Lamartine, Bernardin-de-Saint-Pierre[sic]」の書を、女性達は自身の趣味に従って読んでいるものであるが、こうした読書によって、「若い魂を広げ、これを豊かな思想で満ちし、賢明な金言で強化し、そこ[魂]から、神が託した天井の光である美への感情を迸らせる」べきなのに、こうした勉強が女学者を養成することを恐れるあまり、歴史の「幾つかの年代、幾つかの事件」の暗記などといった浅薄な知識の記憶だけが重視されてきたとしている<sup>(16)</sup>。

尤も、浅く広く、表面的な知識の堆積物を形成するだけの知育は、記憶力を重視する「男子の教育の形式的なやり方」を女子教育に持ち込んだことに由来しているとしており、Martin は、前世紀と変わらない男子の教育にも批判的であった<sup>(17)</sup>。

Martin は、女性達が子供の良き導き手となるために、「社会が女性を閉じ込めている狭い領域 (cercle étroit)」から彼女達を抜け出させ、その思考の範囲を「我々を、より良く、より幸福にしうる対象全て」に広げることが重要であると考えた。こうして女性達には、「宗教と哲学と倫理の領域<sup>(18)</sup>」を学ぶことが推奨されるのである。但し、ここでは、女性の学びが必ずしも女性自身の自己実現を目的としているわけではないという点に限界もあるが、Loi Guizot が1836年(6月23日付)の女子初等学校に関する王命発令

女子にも適用される前に、女性の知への接近を推進する論拠を本書で改めて与えたという点は評価できるであろう。

## II. Necker de Saussure

さて、良妻賢母主義を基調とする社会通念が幅をきかせるこの時代、Albertine- Adrienne NECKER DE SAUSSURE<sup>(19)</sup> (1766-1841)は、*L'Education progressive, ou Etude du cours de la vie*<sup>(20)</sup> の第3巻 (1838年) で、伝統的な女性の役割に注目しつつ、更に女性のより多様な運命に目配りした上で、「家庭と社会での役割を果たし得る自由で思慮深い女性<sup>(21)</sup>」像を提示した。

彼女はまず、女性を教育することの重要性を、これまでも見られたように、女性の影響力の大きさに言及することで浮き彫りにしようとする。確かに、今や、女性達が君臨していた社交界は、「その昔の重要性を失ってしまった」し、前世紀の女性達の「影響力の輝かしい痕跡が残っているにも拘わらず、彼女達の役割は、あらゆる点で、[以前程] 目立たず、自尊心を満足させなくなってしまった」<sup>(22)</sup>。しかし、彼女によると、前世紀の女性達の影響力は、本来女性には相応しくない«un genre d'empire qui n'était jamais qu'une usurpation»であるから、こうした影響力の低下は嘆くべき現象ではないとする。女性には、«une influence heureuse que les femmes sont destinées à exercer<sup>(23)</sup>»があるのであるから。とりわけ、「生来信仰心のある」女性は、キリスト教徒として倫理的な影響力を持ちうる<sup>(24)</sup>。又、「最も良くその運命を全うする女性は、状況によって与えられた活動範囲で、最も幸いな影響力を行使する女性である」から、既婚女性は、「妻として、母として、主婦として」影響力を行使することになるのである<sup>(25)</sup>。尤も、女性達は、その経済的状況や既婚・未婚を問わずプライベートな生活に影響力を及ぼすものである。なぜなら、女性達は家庭の幸福の鍵を握るばかりでなく、その影響力は女性達の助言が及ぶ家庭以外の人間関係にまで波及することになるからである<sup>(26)</sup>。しかし、とりわけ、女性達は«institutrices nées»であるから、子供達に「常に向上する手段」を与えることもできるである

う。こうして、「家庭の屋根の下で、体制を支え、あるいはその失墜を準備するああした世論や風俗が形成されるのである<sup>(27)</sup>」。Necker de Saussureが、「pour obtenir le progrès auquel on aspire, ce sont peut-être les femmes avant tout qu'il importe de perfectionner. Formez-les<sup>(28)</sup>」と、社会の望ましい進歩のために、声高に女性の育成を叫ぶのは、こうした女性の多大な影響力を認識していたからに他ならない。したがって、彼女は、女性達に、「社会全体の幸福に貢献しようとする確固たる意図と手段」を与えるような、「une éducation éclairée et religieuse」を理想としていた<sup>(29)</sup>。

しかし、彼女は、他者との関係においてのみ女性の教育を重要視したわけではなかった。確かに、法は、「婚姻において、女性全体に従属の影を投げかけている」ように思われるし、福音書も「女性達よ、汝の夫に服従せよ」と言っている<sup>(30)</sup>。しかし、福音書は、又、「汝らは、イエス=キリストへの信仰によって、皆神の子供達である。もはや、奴隷も、自由人も、男も、女もない」とも言っている<sup>(31)</sup>。よって、「Aucune condition sociale ne [la femme] oblige à se mettre dans la dépendance」なのである。そもそも、男性は、女性の中に「妻しか見ようとしてこなかった」し、若い娘には、「未来の妻」を見てきたが、女性達の中には、「妻という身分とは無関係の多くの天賦の才(dons)」があるのである。その上、女性が必ずしも夫を持つとは限らないし、貧しい階級の娘達は、男性達に頼ることなく生涯仕事をして自活しているのである<sup>(32)</sup>。こうしたことを念頭に置けば、当然、「Il importe donc que l'éducation développe chez la jeune fille les facultés qui lui donneront la perspective la plus assurée de sagesse, de bonheur, d'utilité, de dignité, quel que soit son sort<sup>(33)</sup>」ということになる。だからこそ、女性自身のための能力育成を若いうちから図る必要があるのである。そして、このような教育こそは「男性達のエゴイズムが許容してこなかったもの<sup>(34)</sup>」だと彼女は語気を強める。したがって、女性の教育を「男性に関する」ものに限定したRousseauの「不当で誤った意見が今日もまだ支配している」が、「賢明な母親はこれを故意に[娘達に] 伝えることはないであろう」としてい

る<sup>(35)</sup>。有能な女性達の活躍の歴史に加え、七月王政時代のフェミニズム運動の高まりや、産業革命の進行に伴う女子労働者の増加といった社会現象が、Necker de Saussureに型通りの良妻賢母養成の教育という枠を超えさせることになったのではないかと思われる。

勿論こうした主張の根底には、女性の知的能力への強い信頼があったことは言うまでもない。事実、Necker de Saussureは、「Les dons de l'âme et de l'esprit sont essentiellement les mêmes dans les deux sexes, et il n'y a de différences que dans les proportions」と言っている。但し、ここには、あのPoulain de La Barreの男女の本質的な知的能力の同一性と同時に、Rousseauの男女の能力の補完性の理論の融合を思わせるものがある。事実、彼女は、数学の分野で優れた業績を挙げたSophie GERMAINなど、「女性達の趣味や才能と最も無縁と思われるジャンルにおいてさえ」、「大いなる高み」に達した例があるとして、女性の能力を擁護している<sup>(36)</sup>。しかし、男女は「同じ天性の素質」を持つ一方で、それぞれに「欠けているもの」については、互いに「助けと慰め」になるとも考えていたのである<sup>(37)</sup>。

とはいえ、男性と同等の知的陶冶の可能性は、女性が受ける教育次第であると彼女が考えていたことは間違いない。事実、少年と少女と一緒に教育を受けている間は、「la parfaite égalité intellectuelle」があり、両者は、「le même intérêt à toute les branches de leurs études」を抱き、その知性の陶冶も「le même succès」が得られるが、「一方が他方よりしっかりした知育を受けようになると」、両者の格差が始まると彼女は指摘している。とりわけ、知性の発達に最も適した時期である12-18才の間に、若い娘達には、「自惚れという、理性を発達させることや学問への好みとは関係のない動機に触発された知育」が施され、「学んだと見えさえすれば」良く、その学習内容には「全く無関心」で、その上、「一貫性も方法も欠如したレッスン」がなされている。これが、「女性達の知的脆弱さ」の原因なのだと言ったと彼女は結論づけた<sup>(38)</sup>。

ところで、Necker de Saussureは、福音書による徳育を重視してい

たが<sup>(39)</sup>、学業による女性の知的陶冶の有用性をも大いに認識していた。なぜなら、「女性の天職[妻、母といった女性の役割]は、知性的な内面の発達を必要とする」からである。したがって、「*Tant que les femmes seront incapables de juger les choses impartialement, tant qu'il n'y aura pour elles d'intérêt que dans les impressions, les émotions excitées ou reçues, elles ne seront ni épouses, ni amies, ni mères comme il faudrait l'être*」ということになる<sup>(40)</sup>。

又、「生まれながらの教師」である女性は、自身の子供を導くだけでなく、教師という仕事に携わることで勉学を役立てることもできる。「自身の勉学を有効に活用できるという希望ほど、女性達にそれ[知識]を獲得する意欲を掻き立てるものはない」と言う彼女は、「*Le métier d'institutrice est fait pour les femmes*」として、若い娘達に、「母親になるという考えを、彼女達に露骨に示し過ぎないで、教師の道を提案する」ことも許されるはずだと考えた。なぜなら、若い娘達が母親となるために、知性や倫理性などが育まれても、将来、子を失い、悲嘆に暮れるという事態も予想されるからである。そもそも国が進める女子初等学校の整備には女教師の養成が不可欠であり、教師という職業の推奨は時代の流れに呼応したものであると言える。尤も、彼女は「可愛そうな子供達」を対象とする教師の仕事を女性が取り組むべき慈善活動の延長線上に位置づけているようである<sup>(41)</sup>。しかし、更に、女性達が作家となって教育図書を出版することで、子供達や一般庶民の人々を対象とした幅広い教育活動を行なう可能性にも言及していた。すなわち、「もっと年輩になって、時間が自由に使えるようになったら」、女性達は、「*singulièrement propres à populariser l'instruction, à lui donner ces formes animées qui saisissent l'imagination des enfans et des gens du peuple*」なのである。この点では、多数の教養書を出版した Maria EDGEWORTH (1767-1849) や Jane MARCET (1769-1858) などの優れた前例があるとしている<sup>(42)</sup>。

しかし、このように「他人のために自身の知識を役立てる事が立場上でできない場合は」、*«la recherche de la vérité par amour pour la vérité même»*<sup>(43)</sup>へ

の趣味を持つこともできるとしている。これは、例えば、ブルジョワジー以上の階級の女性達にとって、職業に従事しないことは彼女達のステータスの構成要因であったから、たとえその能力があっても、教師や作家になるというのは、必ずしも現実的な選択ではないといった事情を考慮したものと思われる。彼女は、「男性が抱く、かくも純粹で、かくも無私の学問の進歩への熱情」を女性も感じる事が可能であるとし、「arts」や「littérature légère」の分野で成功するだけでなく、「sciences naturelles」の分野でも女性達は、「その明敏さを発揮する」事が可能であるとした<sup>(44)</sup>。これは、前世紀、女性達の間に見られた学問熱を想起させるものである。

勿論、そうした高度なレベルに達しなくとも、若い娘達が、「un désir sincère de s'instruire<sup>(45)</sup>」を持つことは好ましい。若い頃の「真に知的な努力のあした放棄」が、「生涯に互る多くの倦怠、多くの怠惰」の原因となり、健全な知的欲求を持たず「小説しか読まず、綴れ織りしかしない」女性になってしまう危険性があるからである<sup>(46)</sup>。勉学に勤しむことは、生涯有益であると彼女は考えていた。子供がいない、もしくは未婚の富裕階級の有閑女性にとって、あの「倦怠という罪の根源<sup>(47)</sup>」を防止するために、「真面目な勉強」、「集中力を必要とし、真の仕事の材料を提供する勉強<sup>(48)</sup>」が有効な手立てとなるからである。これは、生活の空虚を満たす単なる気晴らしのことを言っているのではない。彼女は、あくまでも内面の充実を想定していたのであった。

尤も、彼女は、男性並に女性達が学問に勤しむことを特に奨励したわけではなかった。確かに、文学や芸術以外に、これまで女性達が専心することが希であった分野にも勤しむ可能性を肯定はしているが、「経験が、もっと穏やかなジャンルの勉強が、彼女達により持続的で危険の少ない楽しみを取っておいてくれることを教えてくれるものだ<sup>(49)</sup>」と言っている。又、「高い知的水準」を有している少数の女性達は、他の女性達「以上に幸福でも、長所が多いわけでもない<sup>(50)</sup>」とも言っており、前世紀のような女性の学問熱の再来を単純に期待していたわけではなかった。女性に与えられ



た「真の使命 (destination véritable)」は、「有益である (utile) こと」であるから、その能力は、有用な女性となるよう、とりわけ「女性の天職がより良く全うされるために<sup>(51)</sup>」育まれるべきだという考えが中心にあったのである。

彼女は、「nous-même n'avons nulle idée d'obtenir une instruction à la fois vaste et profonde pour les femmes, nous la voudrions seulement plus fondée en principe, plus raisonnée, plus propre à les faire réfléchir」と言っており、幅広く深い知識を与えるよりも、思慮深い女性を養成するような理に適った知育を重視していた。しかし、更に、「Nous aimerions que l'ordonnance du monde physique et moral leur[aux femmes] parût digne d'être étudiée, que leur curiosité se tournât parfois sur les idées universelles et sur la nature, et non éternellement sur les intérêts de société<sup>(52)</sup>」と続けており、女性達の知的関心の対象の広がりを示唆するものである。

ではここで、著者の考える具体的な知育の内容の要点をまとめてみよう。彼女は、娘達が結婚後のあらゆる状況に対応できる「aptitude universelle」を身に付けるために知性全般の発達を重視していた<sup>(53)</sup>。そのために提案されているのが、「推論の鍛錬」と「想像力と記憶力の陶冶<sup>(54)</sup>」のための学習である。

とりわけ、「推論 (raisonnement)」は、「最も必要であるのに、女性達において最も育まれていない能力<sup>(55)</sup>」であるとする。この能力の鍛練のために、まず、「自然への好み」(10才以前から育まれる。)を吹き込み、「esprit d'observation」を養成する必要がある。この精神は、自然観察を行なう博物学の勉強によって鍛えられることになる。更に、観察から得た事実から、「的確な結論を引き出す術」を学ぶために、数学の勉強が必要である。予め、簡単な計算を習慣的に訓練し(10才以前)、更に、「理屈だった算術」を段階的に学習させるという下準備をした上で、代数学や幾何学に取り組みせるのである。こうした基礎の上に、「次々と知る法則に従って自然現象を説明する試みほど、判別力 (discernement) を養成するに相応しいものはな

い」から、娘達を物理・科学の勉強に取り組ませることになる。又、「物理学と化学の法則は、家政が扱う様々な対象を支配しているから」、こうした勉強は、将来のために「実際の有用性」があるというメリットもある<sup>(56)</sup>。

尤も、彼女が考える本書での科学教育は「instruction légèrement scientifique<sup>(57)</sup>」であった。基礎的なレベルを想定していたものと思われる。そして、数学の勉強（とりわけ、「算術と幾何学の基礎知識の勉強」が重要）によって精神が培われれば、生徒は、「物理と化学についての最もとっつき易い書物<sup>(58)</sup>」が容易に理解できるようになるとして、学習に普及書の活用を示唆していることも付け加えておきたい。

ところで、女子教育に数学や自然科学を取り入れることに対する世間の「反駁」を、Necker de Saussureは予想していた。若い娘が銜学趣味に陥るとか、若い娘に期待される魅力を損なうという批判が想定されるからである。これらに対して、彼女はまず、「On en[objection] avancerait un bien surannée si l'on prétendait que les connaissances de ce genre donneraient de la pédanterie aux jeunes filles」とし、更に、MolièreやBoileauが「ああした傲慢」を矯正したから「女性達は、今では少々慎重であり過ぎるので、銜学的にはなりえない」と反論している<sup>(59)</sup>。次に、こうした勉強が、若い娘達に求められる「完璧な優美さ」や「感受性の表れ」といった魅力を損なうのは、むしろ、過剰なレッスンや、こうした魅力を持ちたいという欲求であり、虚栄心であるとする。又、そもそもこうした魅力は、娘達にとって、必ずしも「知恵、将来の幸福の条件」とはなりえないのではないかという疑念さえ彼女は抱いていたのであった<sup>(60)</sup>。これは、時代の有為転変を経て、理性的な女性の育成こそが、結局のところ女性の将来にとって重要であると、実際の観点から考えたからではなかろうか。

一方、「想像力と記憶力の陶冶」に関する学習に位置付けられているのは、語学と歴史、地理、詩である。

尤も、語学の学習については、実際的な必要性から「正確に話し、書く術」の教育を主張するという「狭い視点」にのみ止まらざることを回避する

Necker de Saussureは、語学学習そのものに、「知性を全体的に育む<sup>(61)</sup>」という効用を見ていた。特に、外国語テキストの的確な仏語訳の作業は、フランス語の鍛練（文体や表現のレベルでの）になるばかりでなく、知的訓練としても有益なのである<sup>(62)</sup>。

尚、学習の対象として挙げられている外国語は、ドイツ語、イタリア語、英語である。外国語学習から、文学作品の読書が示唆されているのは、ドイツ語と英語であった。特にドイツ語については、語学学習による知的鍛練よりも、後に、ドイツ語で書かれた文学の「原文のもつ美しさ」を「既に陶冶された精神」によって味わうことになるという利点が期待されている<sup>(63)</sup>。又、英語については、その構造を学ぶこと自体が興味深いばかりでなく、英国の文学は、「une littérature immense, noble, chaste, animée d'un esprit ferme et vivifiant」を提供してくれるのである。要するに英語の習得は、どの年代の女性に対しても心と頭に「無限の糧」を与えることになる著者は結論付けている<sup>(64)</sup>。

次に、歴史（聖史、古代史、近・現代の世界史）の勉強は、時代と人の有り様を喚起するために、若い娘の想像力、とりわけ、「劇的想像力 (imagination dramatique)」に訴えかけて教えられる。但し、ここではまず、「知識 (savoir)」よりも「趣味 (goût)」が重要で、歴史的事実の叙述を楽しみ、そうした叙述の書の読書が、危険な書物の読書にとって代わり、若い娘の「知的水準を高めることができる」とされている<sup>(65)</sup>。

更に、互いに関連付けられていく各時代の主要な事実は、年代と共に「記憶力に委ねられる」。「対照歴史年表」の作成は、記憶力の鍛練となるものである<sup>(66)</sup>。

これらに加えて、歴史の中にある「把握すべき一般的な意味」を理解しなければ、歴史全体を学んだことにはならない。これが、「精神と心情にとっての教え」となるべきものである。但し、こうした徳育を娘に施すために、Necker de Saussureは、「見識ある母親」がBossuetの*Histoire universelle*を手引書とすることで、「人類の教育のために神の道が現れるあの広大な展望」

を娘に明らかにすることを推奨している<sup>(67)</sup>。

一方、「絵画的想像力(imagination pittoresque)<sup>(68)</sup>」に訴えかける地理の学習については、10才までに通常の地理学に親しんだ後、歴史と関連付けて学び、地図で「政治区分網」を辿ることになる<sup>(69)</sup>。「幾つかの地図を大凡の形で作成」することが記憶力の鍛練になる。こうした学習を経て、地理学の後に「宇宙誌の講義(cours de sphère)」が続くことになる<sup>(70)</sup>。

最後に、Necker de Saussureは、「詩的想像力」を「注意力」と共に知性の構成原理として重視し<sup>(71)</sup>、詩の学習の意義を示唆している。その上、孤独や不眠、無為の状態にある女性にとっては、詩の階調が心の平安をもたらすという効用もある。又、細々とした日常の仕事のせいで精神が偏狭になり易い女性達には、とりわけ詩情という「高邁さの源(source de gaudeur)」が必要なのである<sup>(72)</sup>。尤も、「信仰は魂の最も高度な詩」であるとする彼女は、「若い娘達の記憶力に」宗教的な調子を帯びた詩や劇詩を委ねるとしている。しかし、同時に、「最も無垢な世俗的情愛を表現する韻文あるいは散文の作品に精通」することによって「彼女達の精神を豊かにし、彼女達の中に、知的楽しみへの好みを育む」のだとした<sup>(73)</sup>。

10才を過ぎてから15才までのこうした知育は、毎日計4時間かけてなされるという<sup>(74)</sup>。これに対して、宗教教育とその実践に充てられる時間が1時間、芸術(音楽あるいはデッサン)に1時間半、家事仕事など女性の仕事には1時間半が充てられるということであるから、知的鍛練を重視する傾向が窺える。

しかも、「最初は初歩的な基礎」から始められる«sciences exactes et naturelles»、«littérature dans divers langues»、«histoire»は、それぞれ無限に枝別れしていく主だった分野であり、«Nous croyons que si des lectures dans ces trois genres (fussent-elles aussi dégagées que possible de difficultés) prenaient place à des intervalles rapprochés dans la vie entière, jamais l'esprit ne se rouillerait, on conserverait des facultés encore intactes jusqu'à un âge avancé [...]»<sup>(75)</sup>と、読書という手段で、こうしたジャンルに付随する多様な学習を、生涯に亘って

続けることの有用性が示されているのである。

さて、16才から18才までの時期では、宗教教育が継続される一方で、これまでの知育の「大きな欠落部分」を埋める必要があると著者は考えていた。知育は継続されねばならないのである。Necker de Saussureは、世間の父親が、娘に対しては、家名と財産の守り手である息子にかけような期待をしないため、娘の知性を発達させることを好まない現実を遺憾に思っていた。「知性が全開している」この時期の娘を「励まし、ある種の書物を推薦し、彼女がそれらを読んだ後で、質問してやり、それらを良く理解できるように彼女が見出だす可能性のある困難を取り除くことに、1日10分でも時間を費やしてやったら、この若い知性に与える作用は想像できない程だろう」と彼女は言っている。こうした知育の継続が、父と娘がともに関心を持つテーマについて「愛情が籠っていると同時にしっかりとした対話」を可能にし、これが父親自身にとっても老後の有益な糧となりえるのである<sup>(76)</sup>。

しかし、娘を導く者がいない場合は、「百科に互る概説書(abrégés encyclopédiques)」の利用が適当(この時期には、こうした書物が幼年期の初め以上に適当であるとされている。)であるという。「多様な主題が扱われている」こうした概説書で、「歴史や地理、あるいは欠くことのできないなんらかの他の知識」を把握することで、自身が学んできたジャンルの知識の欠落部分を補うことができるからである<sup>(77)</sup>。

更に著者は、「娘が自分から獲得しようとは思わないが、後になって非常に有益になる知識」を列挙して、欠落していた知識を埋めることを促している。それは、「langue de la comptabilité」、*«quelques principes généraux d'économie domestique»*、*«connaissance raisonnée des premiers éléments de l'hygiène»*で、いずれも、将来家庭婦人となった際必要になる実用的な知識である<sup>(78)</sup>。

18才という結婚を控えた年頃になったら、この時期に特徴的な、内面の「危険な高揚」を鎮めるために、学業が強く推奨されることになる。勤勉さが鎮静効果を発揮するはずであるから、「想像力の支配に最も委ねられ

る」この年頃には、特に「厳しく難しい学習」が課せられるべきなのである<sup>(79)</sup>。

とりわけ、「思考の習慣的な流れを断ち、想像力に付きまとう夢を消すために」最も有効なのは、「若い娘に、その関心事とは最も無関係な学習対象を提案すること」だとして、著者は、「*«sciences exactes et naturelles»*」の学習の有用性を指摘している<sup>(80)</sup>。中でも、天文学について、彼女は、「*«Quelle occupation alors plus salubre que la magnifique étude de l'astronomie! Quoi de plus grand, de plus poétique, de plus propre à exercer toutes les forces de l'intelligence»*<sup>(81)</sup>」と言うように、これを知性の鍛練となる健全な学問とみなしている。のみならず、「この荘厳な学問は人類の[偉大な]精神全体を表わす」ものであると同時に、「自身の限界を認識し」、宇宙という「神の見事で神秘的な作品を前にして平伏する」ことを余儀なくさせる学問である。したがって、人生で、しばしば困難に出会い、その「精神を掻き乱す」悩み事の渦中にあっても、天文学を学ぶことで、女性は、「冷静さ」と「高邁さ」を取り戻し、その時々呪縛から解放されうるのである<sup>(82)</sup>。

天文学以外には、植物学が、「*«Lorsque l'exercice en plein air est indispensable pour la santé, et que les promenades solitaires sont favorables à la rêverie, la botanique peut offrir une douce et charmante occupation»*<sup>(83)</sup>」であるとして、彼女は特に推奨している。植物学を、危険な夢を防止する健全で楽しい関心事とみなしていたのであった。

ところで、心を掻き乱す夢に捕えられ易いこの時期に、特に「若い娘から、明らかに不道徳なあらゆる虚構作品を遠ざける」ことを彼女は要求している<sup>(84)</sup>。しかし、本来、「文学への好み」は「*«amusemens si paisibles, si sédentaires, si dénués d'apparat»*」であるから「女性向き」である。又、これは、女性にとって「苦しい時の慰めと知性の弛まぬ発達の強力な手立て」となりうる「高貴な気晴らし」であるから、適切に選択しさえすれば、女性が取り組むことに問題はないと彼女は考えていた<sup>(85)</sup>。実際、「想像力に危険のない作用を刻印するために書かれた興味深い作品」、「無垢な好奇心に豊

富な滋養を提供する<sup>(86)</sup>」優れた文学作品も多数あることを彼女は認めていたのである。

更に、結婚後も、知的陶冶は継続される。「Lorsqu'une femme cherche à étendre ses connaissances dans le but sincère d'élever son fils, chacun s'intéresse à son entreprise, chacun l'encourage<sup>(87)</sup>」とされているように、息子の教育者としての役割のために女性が教養を積むことに対しては、夫のみならず世間からも容易に賛同が得られるであろう。しかし、先にも示したように、どのような立場であれ、女性が勉学に勤しむことの効用を著者は認めていたのであった。女性達には、まず、キリスト教徒に相応しい「宗教史と宗教文学」の学習<sup>(88)</sup>が推奨されるが、それだけではない。「思い出、悔恨が入り込むことのない、そして彼女達のまだ活発な精神が、それ[この精神]を鎮めると同時に鍛える対象を見出だすような避難所」である«étude si douce et si élevé des phénomènes de la nature»に取り組むことが、特に推奨されているのである。具体的には、まず、農芸にも役立つ、「女性達に大いに好まれている学問である、植物学」、次いで、昆虫の研究、気象学、天文学が挙げられている<sup>(89)</sup>。

伝統的な女性の役割を重視する立場が、その学習内容に限界を与えている点も見て取れるが、少なくとも当時の公教育が女子のために想定していた内容を遥かに超えるものであったことだけは事実である。又何よりも、Madame Necker de Saussureが女性のより多様な運命に対応可能で、且つ生涯有効な知的鍛練を重視し、前世期の啓蒙の時代精神の波及効果の継承を思わせるような内容を持つ女子の知育のプランを具体的に提供したその先進性は、comtesse de Genlisの試みを想起させるものであり、評価に値するであろう。

## むすび

既に17-18世紀の女子教育論に見られた女性の家庭での役割遂行のための女子の知育擁護の理念は、19世紀、女性性信仰のイデオロギーに支えら

れた女性固有の役割への固執と、家庭を基盤とした効率的で安定した社会構築への希求とが合致して、益々幅を利かせて行くことになる。もはや、女性達には、前世紀の「女性の黄金時代」をそのままの形で再現することは叶わない。しかし、彼女達は、称揚される妻、母、主婦の役割を自ら進んで立派に果たすことで、失われた栄光を取り戻すことになるであろう。世紀初頭から7月王政時代までの女子の知育擁護論の中にも、そうした意図が明確に表明されているものがあつたことを思い出したい。

とはいえ、19世紀前半の女子の知育擁護論が、基本的に有能な家庭婦人の養成を目指して、時に節度ある範囲内での実際的な知識を提唱する一方で、反無知の立場、女性の知的能力への強い信頼（知育による女性の知的能力の進歩の可能性も含めて）、理性的な思考力の重視、知的陶冶の様々な精神的効用への信念、これらに根差したしっかりした知育や、幅広い教養（特に上層階級の場合に限られるが）の提唱がなされていることにも注目すべきである。そこには、変わらぬ伝統と18世紀の時代精神の継承の両方を認めることができる。

尤も、これまで見てきた女子の知育擁護の言説は、皆、18世紀の啓蒙の時代に生を受け、その時代精神の洗礼を受けたと思われる識者（それも、男性ひとりを除けば全て知的エリート女性達である。）によるものであるから、それも当然であろう。時代に適合する女性像を提示する彼らも又、啓蒙の時代と19世紀の橋渡しをしたのであつた。尚、こうした言説の展開されている教育論の大半が、その後も再版されていることにも注目したい。

しかし、知育の目的が、女性の天与の役割遂行のためであれ、知的陶冶の効用の恩恵に浴するためであれ、又、たとえ相変わらず無知と博学の間のレベルの知識しか求められていないにせよ、19世紀になつても、女性達が進んで知に接近する正当な口実が相変わらず存在していたということだけは確かである。そして、婦人達の楽しみと自己啓発のために、不備な女子の公教育の補完としての家庭教育用に、あるいは緩慢ながらも進展していく女子教育制度下での学校教育用に、知的啓蒙書が出版されていくこと



になるであろう。

## 註

(1) Martinは、1813年、パリで公開講座を行っている教育施設(Athénée)の正教授職(chaire)に就いて中世フランス文学を教え、1815年には、Ecole polytechniqueの文学と倫理、歴史の教授に任じられた。1831年に、同校が「内務省から陸軍省に移ると免職となり、数年後、bibliothèque Sainte-Genevièveの館長になった」。(BUISSON, *Nouveau Dictionnaire de pédagogie*, Hachette, 1911, p. 1241 参照。)

文学に造詣が深く、とりわけ「優れた愛書家」で、Racineの全集(1821年)やMolièreの全集(1823-1824年)などの古典に注釈と優れた註を付けて出版したとされている。(Biographie universelle ancienne et moderne, tome XXVII, M<sup>me</sup> C. Desplaces, pp. 136-137 参照。)

彼は、19世紀前半幾度も版を重ねた女性用の科学の普及書 *Lettres à Sophie sur la physique, la chimie et l'histoire naturelle* (1810) や、若い人用の徳育の書 *Etrennes à la jeunesse, recueil d'histoires morales en vers et proses* (1811) なども執筆している。

(2) 本書は、Académie françaiseより賞を与えられ、世紀末まで版を重ね続けた。1847年に第5版、1873年に第9版が、1883年にも再版が出ている。Buissonは、「女子の初等学校の問題について規定していなかった1833年の法律の直後に」、*«la part prépondérante de la femme dans le relèvement des classes populaires et de toutes les classes sociales par l'éducation»* を声高に要求した功績を本書に認めている。(BUISSON, *Op. cit.*, p. 1241 参照。)

(3) MARTIN, *De l'éducation des mères de famille*, tome 1, Paris, C. Gosselin, 1834, p. xxx 参照。

(4) *Ibid.*, tome 1, p. 40. 母親による徳育を重視するMartinは、Rousseauが「一方で、母親達に子供を返し、家庭を復活させる努力をし、他方で、母親の腕から子供[Emile]を奪って、全てを代行しなければならない理想的な教育係りにその子を委ねる」という矛盾を犯し、「彼の目的は、自然のあらゆる絆を壊すことであるかのようだ」と皮肉っている。(Ibid., p. 22 参照。)

(5) *«Il faut que nous fassions des mères qui sachent élever leurs enfants!»* (Ibid., p. 11.)

(6) *Ibid.*, p. 113 参照。

(7) *«le cercle tout entier de notre vie se déroule sous leur influence [des femmes]»* (Ibid.,

tome 2, p. 465.) Martinによると、男性は、母、恋人、妻である女性達の影響下に生涯あり (*Ibid.*, tome 2, p. 465 参照。)、更に、ヨーロッパと人類の行く末も又、女性達の精神的な影響力にかかっていると、*«Jeunes filles, jeunes épouses, tendres mères, c'est dans votre âme bien plus que dans les lois du législateur que reposent aujourd'hui l'avenir de l'Europe et les destinées du genre humain»* (*Ibid.*, p. 471.) とさえ言っている。

(8) Martinは、Fénelonが既に、*De l'éducation des filles* で、女性の役割の重要性ゆえに、とりわけ、男性の教育が女性に委ねられるがために、女性の教育を男性の教育以上に重要だという考えを表明していたことを指摘している。(*Ibid.*, tome 1, p. 77 参照。) 実際、Fénelonは、*«Il est constant que la mauvaise éducation des femmes fait plus de mal que celle des hommes, puisque les désordres des hommes viennent souvent et de la mauvaise éducation qu'ils ont reçue de leurs mères, et des passions que d'autres femmes leur ont inspirées dans un âge plus avancé»* (FÉNELON, *De l'éducation des filles* in *Œuvres* I, Gallimard, 1983, p. 93.) と言った。

(9) Martinは、*«Développons l'âme de la femme»* (MARTIN, *Op. cit.*, tome 1, p. 192.) と記している。

(10) *Ibid.*, p. 40 参照。本書について、Martinは、*«Des esprits peu attentifs m'accuseront peut-être de vouloir ressusciter les femmes savantes; qu'ils se rassurent, le génitif et le datif, comme le dit Montaigne, ne sont pas le but de ce livre»* (*Ibid.*) と言っている。

(11) 各人における、*«sentiment moral»* や *«sentiment du beau»* (*Ibid.*, pp. 253–254.) である魂の能力と、知性との調和を理想とする Martinは、*«les facultés de l'intelligence et les facultés de l'âme doivent être développés simultanément, [...] :les séparer c'est détruire les hommes»* (*Ibid.*, p. 347.) と言っている。

(12) *Ibid.*, p. 68.

(13) *Ibid.*, pp. 66–67 参照。

(14) *Ibid.*, p. 26 参照。

(15) Martinは、*«[...] on consent à développer leur[des femmes] intelligence ; [...] elles effleurent [...] les études encyclopédiques; mais, dans ces études, rien ne les appelle à penser de leurs propres pensées»* (*Ibid.*, p. 86.) と記している。

(16) *Ibid.*, pp. 92–93 参照。

(17) *Ibid.*, pp. 102–103 参照。この他、Martinは、今日、ギリシャ語やラテン語は「文学者や書斎人の勉強の特別な対象」になっており、「もはや我が国の国民教育の基礎になりえない」などと言っている。18世紀にも言われていたコレージュの

学問が時代遅れであるとする主張は、今日も変わっておらず、真の教育とは、人間形成であって術学者を養成することではないということは、今も言われているとしている。(Ibid., pp. 174–175 参照。)

(18) Ibid., pp. 126–127 参照。

(19) 彼女は Genève に生まれ、「父親の監督と指導の許で」立派な教育を受けた。1785年に、銀行家で政治家の Necker の甥と結婚し、M<sup>me</sup> de Staël と義理の従姉妹となって親交を結び、「当時最も上流の社交界」で生きるが、健康上の理由で社交界から次第に遠ざかり、家庭の中に閉じこもり、「自身の子供たちの教育と[自身の] 勉学」で日々を送るようになった。(BUISSON, *Nouveau Dictionnaire de pédagogie*, p. 1397 参照。) *L'Education progressive* には、そうした彼女自身の体験が活かされていると思われる。

(20) *L'Education progressive* の最初の2巻 (Paris, A. Sautet, 1828–1832) は、誕生から幼年期まで(10才まで) の子供の一般の教育について述べたもので(特に女子についての言及はない。)、第3巻(1838年に最初の2巻と共に出た。)は、「Etude de la vie des femmes」という副題を付けて、特に女性の教育(10才以降)を扱っている。尤も、最初の2巻について、著者は、「les premières années de la vie où l'éducation, à quelques nuances près, est la même pour tous les enfans」(NECKER DE SAUSSURE, *L'Education progressive*, tome 1, 1834, George Rouiller, Lauzanne, p. 5.) と言っており、10才までの幼年期の教育については、男女共通という意識があったものと思われる。本書は好評で Académie française より賞を与えられ、「l'une des plus intéressantes productions de la littérature pédagogiques dans notre langue」であり続けた。(BUISSON, *Op. cit.*, p. 1397 参照。) 事実、本書は、少なくともフランス国立図書館の所蔵カタログでは、1844年に再版がなされ、1864年に第4版(2巻本で出た最初の版が初版)が、19世紀末にも第5版が確認できる。

(21) *Dictionnaire des femmes célèbres*, Robert Laffont, 1992, p. 632 参照。

(22) NECKER DE SAUSSURE, *Op. cit.*, tome 3, Paris, Paulin, 1838, p. 2 参照。

(23) Ibid.

(24) Ibid., p.4, pp. 3–6, p. 39 参照。

(25) Ibid., p. 33 参照。

(26) Ibid., p. 2 参照。

(27) Ibid., p. 32 参照。著者は、神が女性達に、「le premier développement de la race entière」を委ねたとして、両性の子供達の教育は女性の天職で、この使命を遂行すべく «une sorte d'école normale ou d'école générale d'enseignement» の設立を訴えた。

(*Ibid.*, pp. 138–139 参照。)

(28) *Ibid.*, p. x.

(29) *Ibid.*, p. 10 参照。

(30) *Ibid.*, p. 20 参照。尚、1804年の民法典は、妻の夫への服従義務を規定した有名な第213条を始め、夫権と父権の絶対的な優位を表明している。福音書による、妻の夫への服従の教えは、「Épître aux Éphésiens» (chap. V, v. 22.) による。

(31) *Ibid.* 参照。福音書の言葉は、「Épître aux Galates» (chap. III, v. 28) による。

(32) *Ibid.*, p. 21 参照。Necker de Saussure は、「la moitié peut-être des femmes existantes n'est pas mariée ou ne l'est plus» (*Ibid.*) と言っているが、統計によると、1836–1840年において、50才で未婚のフランス人女性は13.6%であった。(Data, Larousse, 1989, p. 98 参照。) 19世紀前半、男性よりも低賃金で働く女性の工場労働者は、産業革命進展の担い手であった。「1847年、新しい製糸工場や織物工場で働く、約100万人の労働者のうち、[...] 恐らく半分」が「女性」であったとされている。(ARON (Jean-Paul), *Misérable et glorieuse, la femme du XIX<sup>e</sup> siècle*, Editions complexe, 1980, p. 62 参照。)

(33) *Ibid.*, p. 21.

(34) *Ibid.*, p. 21 参照。

(35) *Ibid.*, pp. 23–24 参照。Necker de Saussure は、「Si l'on veut voir cet égoïsme de l'homme dans tout son jour, écoutons Rousseau: «Toute l'éducation des femmes doit être relative aux hommes [...]» と、*Emile* の一節を引くが、ここでは、Rousseau が、「女性のあらゆる教育」が «êtres que la nature ou l'affection a liés à leurs destinés [des femmes]» に関したものでなく、特に「男性に関して」としたことに彼女は異議を唱えているのである。

(36) *Ibid.*, p. 42 参照。

(37) *Ibid.*, p. 55 参照。

(38) *Ibid.*, p. 50 参照。

(39) 例えば、15才までの時期を扱う本書第2の巻について、著者は、「Nous trouverons pour la partie morale la route tracée dans les principes évangéliques» (*Ibid.*, p. II.) と予告している。

(40) *Ibid.*, p. 52 参照。

(41) *Ibid.*, p. 82 参照。

(42) *Ibid.*, p. 83 参照。Marcet はイギリス人で、科学の普及書の出版で成功を収めた。世紀初頭から1830年にかけて、対話形式の、化学や植物学などの普及書を

世に出している。(Dictionnaire des femmes célèbres, p. 549 参照。)この他、Necker de Saussure は、同じくイギリス人の Hariette MARTINEAU (1802-?) の名も挙げている。彼女は、当時、政治経済学の分野の普及書を出版し、成功を博していた。(Grand Dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle, X, 1873, p. 1281 参照。)有名な Edgeworth の児童書は勿論のこと、彼女達の書もフランスでその翻訳書が出版された。

(43) *Ibid.*, p. 83 参照。

(44) *Ibid.*, pp. 83–84 参照。

(45) *Ibid.*, p. 121.

(46) *Ibid.*, p. 114 参照。

(47) *Ibid.*, p. 367.

(48) *Ibid.*, p. 368 参照。

(49) *Ibid.*, p. 83 参照。

(50) *Ibid.*, p. 84 参照。

(51) *Ibid.*, p. 120, p. 53 参照。

(52) *Ibid.*, pp. 51–52.

(53) *Ibid.*, p. 118 参照。

(54) «EXERCICE DU RAISONNEMENT», «CULTURE DE L'IMAGINATION ET DE LA MÉMOIRE» (*Ibid.*, p. 122, p. 237.)

(55) *Ibid.*, p. 126 参照。10–15 才の間に、この鍛練のために1日最低1時間を充てるとされている。( *Ibid.* 参照。)

(56) *Ibid.*, pp. 131–134 参照。数学については、「Quoi de mieux pour y[aux conclusions justes] parvenir que de s'emparer du parfait modèle de l'art de conclure, d'étudier en un mot les mathématiques?» (*Ibid.*, p. 132.) と著者は言っている。自然観察には、天候も含まれる。( *Ibid.*, p. 133 参照。 ) 又、彼女は、家政が物理と化学の知識に立脚していることに注目して、「La conservation de nos denrées, l'apprêt de nos aliments, l'éclairage et le chauffage des appartemens, les soins qu'exige leur salubrité, tout repose sur les connaissances physiques et chimiques. Et quel avantage pour la mère à venir de pouvoir communiquer de telles lumières [!]» (*Ibid.*, p. 134.) と言っている。

(57) *Ibid.*, p. 135.

(58) *Ibid.*, p. 136 参照。

(59) *Ibid.*, p. 134 参照。

(60) *Ibid.*, p. 135 参照。

(61) *Ibid.*, pp. 137–138 参照。

(62) *Ibid.*, p. 138, p. 141 参照。著者が言うように、母国語と外国語の比較による知的効用は、既に第2巻で述べられている。彼女は、外国語を母国語に的確に翻訳する作業が、「sagacité」や「discernement」を身に付けることにつながると考えていた。( *Ibid.*, tome 2, 1834, p. 505 参照。) 尚、この他、翻訳という作業は、「忍耐力」を養い、言葉の意味を厳密に理解する訓練になるなどの効用も示されている。( *Ibid.*, tome 3, pp. 141–143 参照。) 著者は又、「母国語に磨きをかけること」が女性達にとって最も重要であるから、比較の言語として、ラテン語も女性達には「メリットがあると思われる」として、その学習も容認している。( *Ibid.*, p. 138 参照。)

(63) *Ibid.*, pp. 139–140 参照。

(64) *Ibid.*, pp. 140–141 参照。

(65) *Ibid.*, p. 143 参照。思考させる書として、プルタルコスの *Vies paralelles* や、ラテンの作家達の書の翻訳書(具体的なタイトルは示されていない。)が推奨されている。又、様々な歴史的事実を頭の中で統合する必要があるが、「divers abrégés succincts」では、「ばらばらな部分を互いに繋ぐ糸を容易に見出させる」としている。( *Ibid.*, p. 144 参照。)

(66) *Ibid.*, p. 145, p. 148 参照。

(67) *Ibid.*, p. 145, p. 146 参照。

(68) 著者は、「歴史の学習がまず詩的想像力(l'imagination poétique)」に訴えかけたら、「地理の学習は絵画的想像力(l'imagination pittoresque)に訴えかけることになろう」( *Ibid.*, p. 147.) と述べている。

(69) *Ibid.*, p. 147 参照。

(70) *Ibid.*, pp. 147–148 参照。

(71) *Ibid.*, p. 51 参照。物理の学習で養われる「集中力」と詩の学習で養われる「詩的想像力」の均衡が知性をバランス良く形成すると、著者は考えているようである。( *Ibid.* 参照。)

(72) *Ibid.*, pp. 148–149 参照。

(73) *Ibid.* 参照。「崇高な調子」を「自然の宗教的瞑想」に与えたとして、Lamartine の «plusieurs des méditations[sic]» が推奨されている。( *Ibid.*, p. 149 参照。)

(74) *Ibid.*, p. 150, p. 177 参照。4時間のうち、「études mathématiques et physiques」に1時間、「celles de la grammaire et des langues nationale et étrangère」に1時間、「celles de l'histoire, de géographie」、後に「celle de la sphère」に1時間、「exercices de mémoire qu'exigent les études précédentes」と «ceux qui ont pour objet la culture de l'imagination»

に1時間充てられる。(Ibid., p. 150 参照。)

(75) Ibid., p. 150.

(76) Ibid., pp. 219–220 参照。

(77) Ibid., pp. 218–219 参照。

(78) Ibid., pp. 221–222 参照。

(79) Ibid., pp. 251–252 参照。

(80) Ibid., p. 254 参照。

(81) Ibid., p. 255.

(82) Ibid., p. 255 参照。

(83) Ibid.

(84) Ibid., p. 260 参照。

(85) Ibid., p. 257 参照。

(86) Ibid., pp. 257–258 参照。残念ながら、文学作品の具体的なタイトルは列挙されていない。

(87) Ibid., p. 308.

(88) Ibid., p. 369.

(89) Ibid., pp. 370–377 参照。ここで挙げられている自然現象を扱う勉学については、観察や観測がその基礎に据えられているが、「Cette recherche, qui tient aux sciences naturelles par l'examen des faits, et à la psychologie par l'étude de l'âme, semble tout-à-fait assortie à la nature de leurs facultés» (Ibid., p. 377.) と、著者は女性の能力に相応しいとしている。